阪神・淡路大震災特集

学生ボランティアを考える

昨年３月11日に発生した東日本大震災から10ヶ月。神戸大の学生の中にも、様々な形でボランティアを続ける人がいる。そして、阪神・淡路大震災から17年。ニュースネットでは、ボランティア支援室コーディネーターの藤室玲治さんから、当時の経験とボランティアの意義を伺い、同時に現在の学生ボランティアにその心中を聞いた。

「素人の学生だからこそ」

学生支援室コーディネーター　藤室玲治さん

ボランティアをやりたい学生と、受け入れ先との仲介役を務める藤室さん。阪神・淡路大震災の発生当時は、国際文化学部の2年生としてボランティア活動に関わった。

阪神・淡路大震災が起きた直後、まず気になったのは高校の同級生の安否だったという。連絡の取れない同級生を探しに避難所に向かったそうだ。しかし、そこで目の当たりにしたのは、疲れ切った表情を浮かべた避難者たちの姿だった。「被災地の人に何かしようと思ったんですけど、それを見てからしばらくは何もできなかった」と、藤室さんは当時の無力感を語った。

震災からおよそ2週間後、ボランティアに関わっていた同級生をつてに、避難所に物資を運ぶ活動を始めたが、4月には避難所のボランティアが解散。藤室さんはこの時、ボランティアが節目を迎えたと感じたそうだ。その頃、神大生でボランティアセンターをたちあげようという動きがあり、再び支援に関わるようになる。仮設住宅の入居者との交流が主な活動だった。しかし、月日を経るうちに、仮設住宅から出ていく人が多くなった。「仮設の支援は最後ほど人が少なくなって寂しいんです。人数が少なくなってくるし、まとめ役をやっていた人から順に出て行くから」。次第にボランティアとしての関わりが小さくなってしまったそうだ。

「ボランティアをして役に立ったと思ったことはない」と藤室さん。被災地を見てなんとかしようとボランティアを始めたが、達成感より後悔が強く残ったという。「逆にその後悔が、ボランティアを続ける原動力にもなった」と話した。

また藤室さんは、ボランティアには偽善的で大げさなイメージがあると指摘する。素人がむやみに被災地へボランティアに向かうと、混乱を招くという意見もある。しかし、藤室さんは「そんなことないんです。困っている人がたくさんいるんだから、誰でもいいから助けに行けばいいんですよ」と主張する。

アマチュアリズムこそ、藤室さんがボランティアにおいて最も重要視する考え方だ。「専門家じゃなく、一素人が何ができるかと考えた時、ボランティアは始めやすい。よその人たちがやって来て、被災地の人たちに寄り添うことは、その人たちにとってうれしいんですよ」。

藤室さんは学生ボランティアが、背伸びをして難しいことをやる必要はないと語る。東日本大震災以来、神戸大生も関わる足湯ボランティアなどから、被災者に寄り添うという考えが芽生えてきた。「学生には身の丈に合った知識、特性を生かしたボランティアをしてほしい。学生ボランティアはアマチュアリズムを体現した形だから大事なんです」と話した。

「ボランティアをしようと考えている学生は、東北に行ってほしい。一度被災地を直接見てほしいし、現地の人と直接話をしてほしい。自分の目で見て、耳で聞いた話が重要なんです」。【石橋雄大】

西尾荘の焼け跡（神戸大ニュースネット委員会貯蔵）

学生ボランティアの「今」

「出来る限りのことを」

神林恭子さん（発達・１年）

「1回被災地に行ってみてください。震災のことがもっと身近に感じられますよ」そう語った神林さん。以前からボランティアに行きたいと思っており、ボランティア先の先生にもその旨を話していた。夏休みに、その先生が知人を集め、宮城にある児童デイサービスセンターへボランティアに行った。そこに神林さんも誘われ、被災地へ赴くことに。児童デイサービスセンターは発達障害などの子供たちが、日中だけ一時的に利用する施設。

被災地に降りた当初、神林さんは自分のふがいなさに気づかされ、沈んだという。センターのスタッフの手伝いや、1対1での子供の世話などの仕事があったが、全く役に立った気がしなかったそうだ。また、児童を連れて仙台まで遠足に行く途中、バスが砂利道で揺れ、隣に座っていた児童が俯いて手を強く握ってきた。震災発生直後の恐怖を思い出してしまったのかと考え、何か言おうとしたが、何も声をかけられなかった。

悩みぬいた末に「自分は活動では貢献できない。だから出来ないなりに、被災地に思いをはせることで貢献しよう」と決めた神林さん。すると、スタッフもまた被災者であるのに頑張っている、などといった広い視野で見れるようになったそうだ。その経験から「思いを寄せることがボランティアの第一歩として大切」という自分なりの結論が出せた。

また神林さんは、「被災者」と「非被災者」の立ち位置の差は、何をしても埋めることはできないと語った。また「だからこそ、できるだけ近い人間として接していき、それを埋めようと努力することが大事」と力説した。

神林さんは最後に「（被災地に）1回行ったらその土地に寄り添いたくなりますよ。もう1度行きたいですね」と微笑んだ。これからの神林さんの被災地へのさらなる貢献に期待したい。【小野学】

「未経験者も活動に」

黒木宏太さん（発達・１年）

東日本大震災後の5月、黒木さんは迷いながらも「とにかく行こう」という思いで、ボランティアサークル「ぼらぼん」の活動に参加し、被災地に赴いた。活動後も支援を続けていきたいという思いから、有志で「震災に寄りそう集い」を結成。9月には再び被災地でボランティアを行った。現在も集いを中心に「11えん募金」を立ち上げ、毎月11日に神戸で募金を行うなど、精力的な活動を続けている。だがそんな黒木さんも今、迷いの時期を迎えているという。

黒木さんは「5月の段階では、皆に「今こそ被災地へ」という思いがあったが、9月に再び支援が企画された時は「今は忙しくて行けない」という人が多くなった」と、支援する側の意識の変化を語った。また「11えん募金」も、毎月自転車操業の状態で、何とかメンバーを集めて行っている状態だそうだ。メンバーにも自分の生活があることを考えれば、仕方ないと思うこともあるという。

しかし阪神・淡路大震災の被災地、神戸の学生だからこそ、黒木さんのボランティアに対する意識は強い。「『震災に寄りそう集い』は、継続的に活動を続けていくつもりで立ち上げている。展望が見えない部分も多いが、頑張りたい」と話した。集いでは、毎月の募金にできる限り身近な人を誘い、参加してもらおうと話し合っているという。また、同団体が主催する、月1回被災地を訪問して現地の人を手伝う「月1訪問プロジェクト」では、参加者をボランティア経験者2人、未経験者2人で構成する企画を立てるなど、誰でも参加しやすい環境を作り始めている。

「物理的な復興があっても、被災地の人がやっていけそうだと思えないと、完全に復興したとは言えない」と黒木さん。これからも現在の学生ボランティアが抱える課題に挑戦し続けていく。【片山孝章】

「救援隊代表として」

平尾知香さん（法・３年）

「元々ボランティアしようと思っていたわけではない」と話を始めたのは、学生震災救援隊代表の平尾さん。学生が主体となって開催する地域の祭り「灘チャレンジ」にある時来場した、「道徳の授業で習った『一歩遠いところにいる』と感じる人たち」にスタッフとして触れ合ったことがきっかけとなり、ボランティアを始めたそうだ。

平尾さんは代表として、平時は組織の運営や助成金の申請などを行なっている。取材を受けることもあったが、神戸の地で裏方に徹することが多い。この他、募金活動や「神大モダン・ドンチキ」でのちんどん屋の活動などを精力的にこなしている。

平尾さんが活動を続ける上で学んだこととして「『やらせてもらう』という謙虚さもつこと」がある。「単なる労働力として、決められた作業だけをこなしたり、善意を押し付けたりするのは、逆に相手を傷つけることになりかねない」と話す。また、ボランティアにはお金がかかるため「やりたくてやっているから、出費は惜しまない」という姿勢も大事だという。「ボランティアをやってよかったと思う瞬間は」と問うと「定期的に活動をしている場所で、「ボランティアの学生さん」から「平尾さん」と名前で呼ばれるようになった瞬間」と答えた。

東日本大震災の被災地にはまだ行っていないが、現地に向かう学生ボランティアの申請など、後方支援の面で活躍した平尾さん。「被害の規模が大きい分、復興は大変だろうが、忘れられにくいと思う」と話す。「阪神・淡路大震災の時は、3カ月から半年後には、ニュースで扱われなくなったと聞く。一方東日本大震災関連のニュースは今も続いている。被災者を忘れないでいることは、今後の復興に向け大きな意味を持つ」。

今後の目標として平尾さんは「救援隊が今まで築きあげてきた関係を後輩につないで、阪神淡路大震災を風化させないように努力していきたい。また、東日本大震災から1年たち、復興が進む現在、これらの活動が続いていけるような土台や体制づくりをしたい」と語った。【鈴木太郎】

「被災地が身近に」

曽束安里紗さん（農・２年）

農学部で食料問題について学んでいる曽束さんは、大学内外で様々な活動をする行動派だ。神戸大学ＴＦＴの代表として、世界の食の不均衡を解消するために、岡本のカフェと協力し、売り上げの一部を途上国に寄付しているほか、ユース六篠(りくそう)のメンバーとして、篠山市福住地区で農家やイベントの手伝いをしている。それ以外にも、農学部で食と農業に関する勉強会を主催している。

色々な社会問題に関心を持ち、その問題への関わり方を模索しようとする曽束さん。自ら積極的に社会に関わっていく姿勢が印象的だが、「ボランティアをしている」という感覚はないという。「自分でもできる、社会に役立つことって何かなあ」と考えながら活動をしているそうだ。

原発や地域コミュニティーの問題など、複雑に問題が絡まり合うため、今後復興に向けて誰もが何かしら関わっていくと思われる東日本大震災についても、曽束さんは関心を持った。夏休みの2日間、被災地支援のバスツアーに参加し、南三陸町に足を運んだそうだ。そこでは、ボランティアの拠点であるプレハブの駐車スペースの石やがれきを取り除く作業のほか、地域の芋煮会の手伝いをした。そこで出会った親子連れやお年寄りたちは、特に落ち込んでいる様子はなく、むしろ元気そうだったという。

それまで「関わり方の分からない、大変な問題」だった東日本大震災。「被災地から遠く離れた神戸にいる私が、具体的にできることはまだ見つからない」というが、被災地を訪れてからは「東日本大震災が身近なものになり、関わり方を真剣に考えるようになった」そうだ。友人に誘われて、12月11日にＪＲ六甲道駅で行われた募金活動に参加するなど、少しずつ東日本の復興に向けた取り組みも始めている。「2日間だけだったが、南三陸町は思い入れのある場所になった。機会があれば、また行って様子を見てみたい」と話した。【鈴木太郎】

編集後記

「震災のことを掘り返して取材なんて重い」。私は、震災という命に真正面から向き合う内容を扱うのに、正直はじめはかなり構えてしまっていた。問題意識を持つより先に、相手の気に障るようなことを取材で聞いてしまわないかとばかり考えていたのだ。

昨年12月、私は、阪神・淡路大震災の遺族であり、現在は『1・17希望の灯り』の理事として活動を続けておられる白木利周さんにインタビューをした。遺族の方というだけで委縮していた私だが、そこでの白木さんの言葉は私の意識を根底から覆した。

「どん底の時期もあった。でも皆さんに命の大切さを伝えられる立場になったというのは、幸せなことなのかもしれない」。目の覚める思いがした。震災で心の傷を負われた方々が、その暗い過去を語ってでも伝えようと努力されている姿は、私の心に響いた。やっと一記者として、震災に向き合おうと真の意味で考えられるようになった点で、あのお話は本当に聞いてよかったと感じている。

しかし、私は阪神・淡路大震災の記憶がない世代だ。そんな者の言葉で、震災を誰かに伝えられるのか。記事の一字一句に何時間も悩んだ。他人を完全に理解することなど、到底できないことも痛感した。

だからこそ、この震災特集を少しでも多くの人に読んでほしい。決して巧みな文章ではない。しかし、時間をかけた分、伝えたい思いは全部書いたつもりだ。この震災特集を読むことによって、1人でも震災を考える人が現れることを願っている。【片山孝章】